

財界の大御所

ごう せい の すけ
郷 誠之助 (1865-1942)

東京株式取引所ほか



『男爵郷誠之助君伝』
より

§ 人物データファイル

出生

元治2年1月8日(1865)美濃^{かたがた}国方県郡黒野村(現・岐阜市黒野)に郷純造の次男として生まれる。父純造は黒野村の富裕な百姓の出身だったが、若くして江戸に出て武家奉公を続け、当時は大坂町奉行松平家に仕えていた。誠之助は生後すぐ大坂の父のもとに移る。

生い立ち

慶応2年(1866)父純造は松平家を辞し家族を連れて江戸に移るが、仕官の口がなく浪人生活の苦勞の末、ようやく御家人株を買って慶応4年1月に念願の幕臣となる。幕府はその直後に瓦解してしまうが、純造はすぐに新政府の会計事務局(後の大蔵省)に出仕し、以後官吏として栄進を重ねる。こうして誠之助は江戸から東京となった番町(現・千代田区)で育つが、幼少期から餓鬼大将であり、暴れん坊で手に負えない少年となる。番町小学校、東京英語学校等を経て、明治10年(1877)には生活を改めるべく親元を離れて仙台中学校に入学したが、早くも遊郭に遊ぶなど素行が修まらず、3年時には旅芸人の女役者との艶聞が新聞沙汰になって退学を余儀なくされた。仙台から帰京後も家出して仲間と東海道を無銭旅行するなどして、ついに父から勘当される。その後、京都の同志社や東京の私塾に学び、明治16年(1883)東京大学法学部別課法学に入学したが、翌年2月には伊藤博文の紹介状を携えてドイツ留学のため横浜から渡欧の途に就いた。誠之助は遊蕩児ではあったが、一方で勉学を怠らず語学にも堪能な青年だった。

実業家以前

明治17年（1884）から郷はドイツに留学する。ハイデルベルク、ハレ、ライプチヒの各大学で経済学・哲学等を学び、留学期間は8年近くに及んだ。Doctor von Philosophie（哲学博士。専攻は経済学）の学位を得て、明治24年12月に帰国。帰国の挨拶に訪問した伊藤博文の紹介で、翌25年1月陸奥宗光が大臣を務めていた農商務省の嘱託に任じられる。ここで次官西村捨三とともに前田正名『興業意見』の研究に取りかかるが、陸奥の外相転出に伴い3月には職を辞し、その後3年ほどは茶屋遊びに耽った。

実業家時代

明治28年（1895）東京川崎財閥の総帥川崎八右衛門（初代）の口利きで、郷は業績不振の日本運輸の社長に就任、遊蕩をきっぱりやめて同社の立て直しに取り組み、実業家としての第一歩を踏み出した。日本運輸の業績を回復させた上で明治34年（1901）同社を解散した郷は、この間に日本メリヤス取締役、日本鉛管社長、入山採炭社長等も兼任、経営者としての力量が認められるようになる。明治35年には経営が危機に瀕していた王子製紙の取締役に就任、同社は北海道苫小牧に工場を新設して再建に成功した。

もっとも郷の携わった会社経営がすべて順調だったわけではなく、明治40年（1907）に鈴木藤三郎が設立した日本醤油の取締役となるが、この事業は失敗、同42年に解散した。また、同41年には帝国商業銀行の整理のため取締役会長を引き受けるが、結局破産となり、この整理に郷は私財20万円を投じたといわれる。

明治44年（1911）王子製紙取締役を退任した郷は、東京株式取引所理事長に就任する。大正13年（1924）までの13年の在任期間中は第一次世界大戦後の不況や関東大震災の被害などの困難があったが、世間から賭博場のように白眼視されていた取引所の信用向上に努め、株式市場の発展と近代化に尽力した。郷の実業家としての事績のなかでも特筆されるものである。

この間、大正6年（1917）創設の民間製鉄所・東洋製鉄にも取締役として加わっていたが、同7年に初代社長中野武宮が没すると郷が社長となり、専務中島久万吉とともに経営に当たる。しかし同社は第一次世界大戦後の

不況で経営困難に陥り、大正10年からは官営八幡製鉄所に経営を委託することになった。

大正15年（1926）先に東京株式取引所理事長を辞していた郷は、渋沢栄一に協力して日本郵船と東洋汽船の合併幹旋に乗り出す。ここから郷の本格的な「財界世話業★」としての活動が始まったといわれる。経営不振等の問題をかかえた会社の整理・合併・再建の調整役として、この2大海運会社の合併のほか、金融恐慌（昭和2年）時の十五銀行と川崎造船所の整理、官営八幡製鉄所と東洋製鉄を含む民間製鉄会社6社を統合して日本製鉄とした製鉄大合同（昭和9年）などに当たった。

一方、昭和2年（1927）には東京電燈（現・東京電力の前身）の会長に迎えられ、一緒に取締役に就任した小林一三とともに電力事業の経営に当たる。東京電燈は当時、関東大震災の被害や深刻な不況、さらに電力他社との激しい競争によって経営が行き詰っていた。郷は昭和3年に小林を副社長として会社の改革に当たらせ、同5年には会長のまま社長を兼務して、業績回復と電力業界再編を模索した（同8年から小林に社長職を譲り会長専任に戻る）。昭和11年（1936）一定の再建を果たして郷は同社を退任したが、東京電燈の経営そのものが財界世話業の仕事の一環だったともいえる。

これらの会社経営の傍ら、郷は各種経済団体の設立者・指導者としても活躍した。大正6年（1917）日本工業倶楽部設立とともに専務理事を務め、同11年設立の日本経済聯盟会では常務理事を経て昭和7年（1932）会長に就任、いずれも自身の死去まで在任した。昭和5年には東京商工会議所及び日本商工会議所の会頭となり、同11年まで務めた。さらに昭和6年には全国産業団体联合会設立とともに会長に就任、同12年までその職にあった。これらはいずれも経済界の意向や要望をとりまとめ、政府や社会に働きかける有力な団体であり、この面でも郷の役割は非常に大きかった。

深い学識と私心のない公正な判断、果敢な実行力に加えて「番町会★」に象徴される豊富な人脈もあり、郷は渋沢栄一の後を継ぐ「財界の大御所」として、また「財界の哲人」とも評されて、昭和戦前の実業界に君臨

した。

政治との関わり

明治43年（1910）父純造の死去により男爵位を襲爵、翌44年から昭和17年に没するまで貴族院議員（互選男爵議員）を務めた。また、第1次近衛文麿内閣の昭和12年（1937）から15年の第3次近衛内閣までの期間、内閣参議に任じられた。

社会・文化貢献

郷は美術品の収集家であったが、なかでも根付ねつけのコレクションはその質の高さで有名だった。このコレクションは郷の死後、本人の遺志で当時の皇室博物院に寄贈され、現在は東京国立博物館の「郷コレクション」となっている。

明治45年（1912）3月には日本活動写真株式会社（日活）の創立委員長となり、映画会社を立ち上げた。実際の経営には携わらなかったものの、日本の映画産業発展に一役買っている。

晩年

昭和11年（1936）12月、東京電燈会長、東京及び日本商工会議所会頭など企業・団体の要職を辞し、実業界第一線からの引退を表明した。その後も引き続き経済聯盟会会長に留任、企業・団体の顧問や相談役を務め、政財界の各種会議・委員会にも出席していたが、高血圧症や肺炎により健康が徐々に衰え、昭和17年（1942）1月19日、東京・築地の聖路加病院で死去した。享年77歳。東京・青山墓地の父純造の隣に葬られた。

関係人物

郷純造 誠之助の父。明治前期に大蔵省の能吏として活躍し、特に松方正義に重用される。明治18年（1895）末、内閣制度発足により松方正義が初代大蔵大臣に就任すると、翌年3月に初代大蔵次官に任じられた。大蔵省退官後は勅選貴族院議員を務め、明治33年（1900）一連の功績により男爵に叙せられた。

渋沢栄一 明治初年、渋沢が大蔵省に出仕したのは郷純造の推薦による

といわれている。大蔵省を去って実業界に転じてからも郷家との親交は続き、後年誠之助を王子製紙取締役に推薦するなど実業家としての関係も深かった。『人間郷誠之助』は渋沢の子息の談として「自分の亡い後は郷男によろしくお頼みしたい、これが私の遺言である」という渋沢の言葉を伝えている（p184）。

エピソード

郷には16歳のころから将来を誓い合った1歳年下の許婚者がいた。しかし明治16年（1883）彼女は親代わりの叔父に別の縁談を強いられ、故郷の九州に帰されてしまう。悲観した娘は郷に別れの手紙を送った後、服毒自殺を遂げた。郷の東大在学時のことである。以後、郷は終生正式な結婚をせず、末弟を養子として家督を相続させた（ただし内妻はいて、実子もあった）。

郷は留学中、陸軍軍医としてやはりドイツに留学していた森鷗外と出会っている。鷗外はその「独逸日記」明治18年12月24日の記事で、3歳年少の郷について「快濶の少年にて、好みて撞球技を為す」と書いている。留学中このように打ち込んだだけあって、郷は撞球（ビリヤード）の名手だった。帰国当時は国内では敵なしの日本一の腕前だったと自認している。

キーワード

財界世話業 『男爵郷誠之助君伝』の記述をもとに松浦正孝が要約した定義によれば、「一分野・一業界に止まらず経済界全体にまたがるような事業の整理・調停・合併等の斡旋に、公的利益の見地から携わる経済界の大御所」（『財界の政治経済史』p8）を指す。個々の人物については「財界世話役」ともいう。渋沢栄一は最初にして最大の財界世話役であり、その系譜に和田豊治、井上準之助、郷、そして池田成彬などが連なる。

番町会 大正期から郷の番町の私邸で月1回開かれていた親睦会で、メンバーは後藤園彦、河合良成、永野護ら主に若手の財界人10人、小林中、正力松太郎らも準メンバーとして参加していた。このグループの一部が昭和9年（1934）当時一大疑獄事件として騒がれた帝人事件（本書「武藤山治」参照）で逮捕されたことで社会の注目を集めることになった。なお、

帝人事件は後に裁判で逮捕者全員に無罪の判決が下された。

神奈川との関わり

県内の箱根・宮ノ下、藤沢・鶴沼、鎌倉・小町、葉山・堀内に別荘を所有していた。関東大震災時は箱根の別荘に滞在していたが、強震により別荘が倒壊、崩れた梁に体をはさまれた状態で4時間後に救出されたものの、全身に傷を負った。

§ 文献案内

著作

郷は生前、経済政策に関する意見書や随筆集などを刊行しているが、それらは現在一般には入手しがたいものとなっている。国立国会図書館の目録などから主なものを次に挙げておく。

『財界随想』郷誠之助著 慶応書房 1939〈未所蔵〉

『財界我観』郷誠之助著 慶応書房 1941〈未所蔵〉

社史

郷は多くの会社の経営に関わったが、財界世話業的な立場での関与だったため、社史として彼の事績を詳述しているものは多くはない。主なものは次のとおりである。

『王子製紙社史2』成田潔英著 王子製紙社史編纂所 1957〈Y、K〉

全4巻と附録篇から成る。著者成田潔英は王子製紙に勤務後、「紙の博物館」館長などを務めた。この第2巻第4篇「日露戦争前後時代」に、経営危機に陥った王子製紙が明治35年（1902）7月、経営陣を刷新した際、郷が取締役の一人として加わったことが記述されている。同社はその後北海道に苦小牧工場を建設し経営再建に成功するが、明治44年（1911）10月、重役間の対立から全役員辞任の事態となり、このとき郷も退任した。

『東京株式取引所五十年史』東京株式取引所 1928〈Y、K〉

第2章「本所の沿革」及び第9章「役員・所員」の記述で、郷が明治44年（1911）12月に理事長に就任し、大正13年（1924）11月にその職を辞任したことがわかる。郷個人の働きには言及されていないが、この間に第一次世界大戦

後の恐慌（大正9年）や関東大震災（大正12年）があり、株式取引所としての対応に郷が腐心したことがうかがわれる。

『東京電燈株式会社開業五十年史』 東京電燈 1936 〈K〉

取締役会長・郷誠之助の序文、口絵に「現重役」として郷と社長・小林一三の肖像あり。「編纂に当って」には、当時東京帝国大学明治新聞雑誌文庫嘱託だった宮武外骨への次の謝辞がある。「特に宮武外骨氏には本史の全般に互って厳密なる校閲をお願い致しました」。「第四期 統制時代（昭和元年より同十年迄）」の記述では、昭和初期の業績の低下の後、社業を一新、10ヵ年の受難期を克服して昭和10年（1935）に更生を迎えたとされている。

『東京電燈株式会社史』 東京電燈株式会社史編纂委員会 1956 〈Y、K〉

序文は第10代社長・小林一三が寄稿。前掲の『東京電燈株式会社開業五十年史』を圧縮して「前編 五十年間略史」とする。「本編 国家管理時代」は昭和11年（1936）から電力の国家統制により同17年3月に解散するまでを記述している。

伝記文献

『人間郷誠之助』野田礼史著 後藤罔彦校閲 今日の問題社 1939 〈K〉

郷の生前に刊行された伝記。著者の経歴等是不明であるが、原稿を後藤罔彦に持ち込み、校閲を依頼した上、出版に至ったものである。後藤によれば著者は郷とは一度も面談していないが、新聞雑誌に掲載された郷の談話や関係者への取材から本書をまとめたという。結果として郷の談話聞き書き風な部分が多く、「郷の接触した人物」「郷の処世訓」「郷の実業実践訓」などの章では郷の人物観や人生観がうかがえる。

『男爵郷誠之助君伝』 郷男爵記念会 1943 〈Y、K〉

郷の没後に池田成彬を会長として財団法人郷男爵記念会が組織され、その事業の一環として編纂された伝記。編纂には後藤罔彦を代表とする男爵郷誠之助伝記編纂所が当たり、昭和17年（1942）8月から1年余をかけて執筆、850頁を超える浩瀚な伝記を同18年11月に刊行した。郷の伝記の定本といえるもので、本稿の記述もこの本に多くを負っている。郷は生前、昭和15年に後藤の勧めで「男爵郷誠之助自伝」という口述筆記を行っていた。この「自伝」は完成に至

らず刊行もされなかったが、その内容は本書に生かされている。なお、池田成彬は三井合名理事、日銀総裁、第1次近衛内閣の蔵相兼商工相などを歴任した財界の重鎮である。後藤罔彦は当時、京成電気軌道（現・京成電鉄）社長、若い頃から郷の知遇を得、郷を身近に知る財界人だった。

「郷誠之助」『財界人思想全集4 財界人の技術観』吉田光邦編集・解説
ダイヤモンド社 1969 p131-150 〈Y〉

『極道』小島直記著 毎日新聞社 1971 〈Y〉

郷誠之助を主人公とする長編伝記小説。郷の生誕から入山採炭社長就任までの青年時代を描く。

「東京株式取引所 株式近代化に尽力した郷誠之助」『日本の「創造力」
8 消費時代の開幕』日本放送出版協会 1992 p289-302 〈Y〉

『財界の政治経済史 井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代』
松浦正孝著 東京大学出版会 2002 〈Y〉

「財界」をキーワードとして戦前日本の政治経済史をとらえようとする学術研究書。「第2章 『財界世話業』の群像」「第5章 財界と外交」で郷誠之助への言及が多い。「第1章 暴かれた財界権力」では帝人事件を紹介、考察している。

¶ 参考文献

『経済団体連合会前史』 経済団体連合 1962 〈Y、K〉

『京成電鉄五十五年史』京成電鉄社史編纂委員会編 京成電鉄 1967
〈Y、K〉

「第10章 昭和10年前後 3 後藤社長就任、本多会長逝く」「第12章 太平洋戦争と私鉄 5 後藤社長の死とその人柄」に後藤罔彦についての記述あり。

『帝人事件 三十年目の証言』河合良成著 講談社 1970 〈Y〉

『日本工業倶楽部五十年史』 日本工業倶楽部 1972 〈Y、K〉

『印籠と根付』東京国立博物館編 二玄社 2000 〈Y〉

郷コレクションの根付を図版で紹介している。

< 閑誠二 >